

□ オペラ

関根 礼子

新国立劇場が20周年を迎えた。メディア等で指摘されたように予算の減少やレパートリーの少なさ、オリジナリティーの乏しさなどいくつかの課題を抱えてはいるが、国際的水準の公演を安定的に提供している最近の成果は評価されるべきだろう。国内唯一の常設オペラ劇場としての基本的役割を、20年目にしてようやくここまで果たし得るようになったかと感慨深いものがある。

この年、同劇場は飯守泰次郎芸術監督のもと「ジークフリート」と「神々の黄昏」を新制作して「ニーベルングの指環」4部作の2つ目のプロダクションを完結させた。もう1つの新制作に「ルチア」があり、シーズン公演の他の演目には「ばらの騎士」や「椿姫」などベーシックな名作の再演が6つ並んだ。主要キャストの多くは海外から招かれ、ワーグナー2作品でジークフリートを歌ったステファン・グールドをはじめ、「ルチア」で共演したアルトゥール・ルチンスキーとイスマエル・ジョルディ、オテロのカルロ・ヴェントレほか有力な歌手が適材適所に配され、安心して楽しめる公演が続いた。日本人歌手も伸びており、妻屋秀和（ロドヴィーゴ）、安藤赴美子（蝶々夫人）、中村恵理（スザンナ）、砂川涼子（ミカエラ）らが観客の期待に応えた。

こうした公演のさらに上を求めるとすれば、バイエルン国立歌劇場の日本公演を措いてない。特に「タンホイザー」ではキル・ペトレニコ指揮による演奏が従来のワーグナーのイメージを刷新する柔らかな美しさで際立った。演出（ロメオ・カステルッチ）は象徴性の高い精緻なシーンの連続で、内容には賛否両論あるにせよ高度のテクニクと格調を感じさせるものだった。オーケストラの演奏能力の確かさと合唱団の統率のとれた動きなどが大きな支えになっている。アッシャー・フィッシュ指揮による「魔笛」は1978年のプレミエ以来同劇場の定番となっている演出（アウグスト・エヴァーディング）で、舞台は美しくアイディアも豊富。両演目とも総合芸術としての完成度の高さに、同歌劇場の長い歴史がしのばれた。

国の予算で運営する新国立劇場で活動内容に独自性を持たせることは困難かもしれないが、民間団体や地域の劇場などで独自のカラーを出すことは比較的容易だ。こうした活動は前年に引き続き各所で活発に展開された。

一例をあげれば、東京二期会では海外の歌劇場と提携することで演出面に新機軸を打ち出し、オペラ界に新風を送った。ローマ歌劇場との提携による「トスカ」ではきわめて正統的かつ豪華な舞台が欧州歌劇場の雰囲気を出し、グライントボーン音楽祭と提携した「ばらの騎士」ではミュージカル一歩手前の軽やかさで若い世代の感覚にアピール。ベルリン・コミッシェ・オーバーと提携した「こうもり」ではアンドレアス・ホモキの演出でウィーン流とは一線を画すドイツ風の舞台で新鮮味を出した。いずれの演目でも歌手、合唱のアンサンブルは適切に訓練され、同会オペラの魅力となっている。歌手で特に光っていたのは、トスカと蝶々夫人を歌った大村博美である。海外で鍛え、世界に通用する表現力を持ちながら、日本人としてのアイデンティティを感じさせる成熟度は注目に値する。

日本オペラ振興会は藤原歌劇団の4演目の内「ノルマ」でマリエッタ・デヴィーアが最高の至芸で傑出。「ルチア」では光岡暁恵が一段と成長した歌唱で魅了した。プリマドンナ・オペラで内外のソプラノがそれぞれに花を咲かせた例である。日本オペラ協会の方は1958年以来活動を率いてきた大賀寛総監督が7月に逝去し、後任に郡愛子が就任。大賀前総監督の蓄積を基に、イタリア物で鍛えた歌手たちの積極的な参加によって、日本オペラの歌唱力の向上が実現しつつある。「よさこい節」「ミスター・シンデレラ」共に役柄を深めた演唱とアンサンブルの充実がこれまでを上回る成果をもたらしていた。

首都圏が国内最大の消費マーケットであるのに対して、いくつかの地方都市は積極的な創造の場として機能した。滋賀県大津市のびわ湖ホールは沼尻竜典芸術監督のもと「ラインの黄金」を制作して「ニーベルングの指環」4部作をスタート。ミハエル・ハンベの演出はプロジェクト・マッピングを活用して台本を忠実に視覚化したもので、ワーグナーが記した「虹の橋を渡る」などという実際には不可能な演出が可能になった。演奏面でも歌手と管弦楽（京都市交響楽団）の手堅いアンサンブルが物語を堅実にたどり、視覚聴覚あわせて大変わかりやすい公演となった。

こうしたストーリーテリングの力は、これまで日本のオペラ界でとかく軽視されがちな点であった。演出だけでなく台本や作曲面も同様で、ストーリーの描き方が不十分なまま感情表現や情景描写だけが先行すると、衣裳つきコンサートもしくはオラトリオ状態になりがちだ。今でもそうしたシーンや作品がどれほど多いことだろう。最近、田尾下哲ら複数の日本の演出家が意識的にこのストーリーテリングの力を探究しつつあるのは大変頼もしい傾向である。

びわ湖ホールではまた、所属する声楽アンサンブルによる「ミカド」が、現代若者感覚を大胆に生かした演出（中村敬一）と日本語による適切な歌唱で傑出していった。同ホールも2018年には開館20周年を迎える。自主制作の数は少ないが、他の劇場にない独自の路線で創造性が発揮されている好例だろう。

愛知県豊橋市のアイブラザ豊橋で開催された三河市民オペラ「イル・トロヴァトーレ」は、中小都市の地域オペラとしては奇跡的といえるほど完成度の高い舞台が、首都圏や関西圏から足を運んだ観客を驚かせた。全国公募オーディションの審査には市民も参加し、森谷真理（レオノーラ）、上江隼人（ルーナ伯爵）、城宏憲（マンリーコ）、山下牧子（アズチーナ）ら今を盛り日本人トップクラスが選ばれた。合唱や制作にはアマチュアならではの熱のこもった手作り感が生かされ、専門家と市民の交流が双方の力を引き上げる形で発揮された。地域オペラの新しいあり方に違いない。

長野県松本市のまつもと市民芸術館実験劇場で開催されたまつもと市民オペラ「ちゃんちき」も画期的だった。團伊玖磨が1975年に発表した作品で、歌詞は全編名古屋弁、邦楽器が加わり、厳しい自然の中での生存競争が動物譚として描かれる。狐の父子（須藤慎吾、九嶋香奈枝）ら歌手の好演を引き立てるように市民合唱団が歌や踊りでコロスのように舞台を豪勢に飾った。じっくりと準備されたことで創造性が豊かに引き出された感があり、市民も多忙で練習に集まりにくい大都会では実現しづらいことかもしれない。

新しい演目では読売日本交響楽団が演奏会形式で全曲日本初上演したメシアンの大編成で長大な「アッジの聖フランチェスコ」、東京文化会館他の主催で日本初演された長田原作曲「Four Nights of Dream」、熊本シティオペラ協会による樹原孝之介作曲「笛姫」初演などが注目された。